

日本がキューバ医療から学ぶべきこと

What Japan should learn from Cuban medical system.

名取 春彦

目次

1. 何故キューバか
2. 初めてのキューバ旅行
3. キューバ再訪の計画
4. 研究所国際部のエリザベス
5. 友だちの友だちは友だち
ラファエルたち、ルシア、セイラ
6. マソラ精神病院 (Hospital Psiquiátrico de la Habana)
7. 国立がん研究所 (Insrituto Nacional de Oncología y Radiología)
見学の始まり、CT撮影装置、頭頸部カンファランス、腔内照射装置の残骸、週末のもてなし
8. 医師たちは月500ペソで生活ができるのか
9. キューバ社会と国民の生活
10. キューバから帰国して日本の原発事故対応を見て

1. 何故キューバか

日本では今、医療問題が噴出している。自殺者が年間三万人を超える事態が十年以上に渡って続いており、クスリ漬け検査漬けがさらに深刻化している。医師不足のため地域の病院は閉鎖され、医療の質の地域間格差、病院間格差が顕著なため、患者は病気の心配よりも病院探しに奔走する。これらはいずれも問題が叫ばれて久しいが、有効な対策は未だ示されない。もはや小手先の改革では効きめはなく、医療システムそのものを見直さなければならない時期が来ている。

海外に優れた医療システムが存在するなら、社会体制の如何を問わずそれらをよく検

討し、優れた点は導入すべきであろう。

米国やヨーロッパ諸国の医療システムについてはすでに検討されているのに対し、キューバの医療システムに関する情報は、そのほとんどがキューバ政府が発信したもので、それを代弁するもので、内容についてはほとんど検討、検証されていない。

キューバを見落としてはいけない理由は、WHOまでもがこの国を医療先進国とみなしている点にある。経済的には困窮しているにも関わらず、乳幼児死亡率が低く平均寿命は高い。それは即ち、限られた予算で必要とされる医療が実現しているということを意味する。そのような事実が日本では一般にあまり注目されていない。

キューバに関心を抱く人たちの間には、

キューバ医療の表側だけを見て、キューバ医療を無批判に称賛する人がいる一方、逆に少数ながらも悪い噂をする人もいる。例えば、海外支援で多数の医師を派遣するあまり国内の医療が手薄になっているといった噂や、医師たちは給与水準が低いことに不満を抱いているといった噂である。

キューバ革命によって政権が変わったとき、キューバの多数の資産家たちは米国に亡命し、マイアミを拠点に反革命グループをつくった。彼らは米政府をも動かし今も執拗に攻撃を続けている。キューバに対する貿易封鎖は東西冷戦終結後も続いており、反キューバ宣伝のための情報操作は今も盛んである。

イラク戦争が終結したところから、米国政府が戦争開始のために情報操作、メディア操作をやっていたことが明らかにされた。日本においても、福島第一原発の爆発事故を契機に情報操作、メディア操作があったことが暴露された。今や情報は特定のグループの利益のために操作されるということが当たり前の事実となっている。ということは、キューバ問題に関しても、米国やその友好国である日本では正しい情報は得られないと考えるべきである。

またその逆に、キューバ医療の優秀性は情報操作によるもので、社会主義独裁国の宣伝である可能性も出てくる。

キューバ医療に何らかのヒントを求めるなら、実際にキューバを訪問し真実を見なければならぬ。医師と会って直接話を聞いたり、現場の診療を見たりするのは勿論のこと、もし本当に優れた医療システムが存在するのなら、医師たちがどのようにそれを支えているのか、患者や国民が医療の恩恵を受けるだけでなく、それをどのようにとらえているかまで見る必要がある。そのためには、キューバ国民の生活や日常も知らなければならない。

キューバの医師の給与は一般公務員なみで平均月額 500 ペソ (約 2000 円) と聞く。この

少ない給与に医師たちは不満はないのか。これだけはどうしても確かめたい。

その上で、医師たちに不満がないなら、その意識の高さはどこから来るのか。それは、革命当初の理想が少しもぶれることなく医師たちに受け継がれているからなのか。

もし医師たちが不満を抱いているなら、政府はそれをどのようにして統制しているのか。また、不満を抱く医師たちはなぜ国外に逃げないのか。海外支援のときなどチャンスはいくらでもあるが、キューバ人医師が亡命したという話は聞かない。これらの疑問を解決したい。

本稿はキューバを訪問し実際に体験したことを報告し、若干の考察を加えたものである。報告のスタイルは、体験した事実とその解釈の二つのうち、どちらに重点を置くかで違ってくる。本稿は、事実の解釈は人によって異なることをかんがみ、あくまで体験した事実の報告に重点を置いた。

2. 初めてのキューバ旅行

私は 2010 年に初めてキューバを旅行した。単にキューバ人の生活に触れてみようと思っただけで、医療機関を訪問するなどの計画は何もなかった。

ハバナに着いてガイドブックを頼りに、医師が経営するという民宿を訪ねてみたが、もう廃業したということであった。道端で声をかけて来たヒネテロに手伝ってもらい、ようやく経営者が英語を話せる民宿に落ち着いた。ヒネテロとは客を紹介してリベートを得る外国人相手の客引きである

宿の主はドーラという女性で、かつてサトウキビの研究者だったが既にリタイヤしている。サトウキビの研究は一時期脚光を浴びたが、今ではもう役に立たない領域だとなげいていた。年老いた母親と住んでいて、余った一室を旅行者に貸している。

そこを拠点に街を見て回った。いろんな人

と出会いいろんな話をしたが、最も印象に残るのはフェリックスだ。

中央公園で一休みしようと思ったが空いているベンチがなかった。それで一人で座っている男性の脇に座った。男性はホームレスのような風采だった。

私は通りを歩く人を眺めていたのだが、しばらくして横の男性がバッグからおもむろに部厚い書物を取り出して読み始めた。容貌とのあまりの不釣り合いに驚いて、思いがけず「何を読んでるんですか？」と尋ねた。

西洋美術史の書籍だった。「英語を話せますか？」と尋ねると、だいたいわかるというので会話が始まった。

ハバナの美術大学のプロフェッサーだと言う。

「自分の好きなことを学生に教え、学生も喜んでいるので仕事が楽しくてしょうがない。去年、研究でベネズエラにしばらく行ってきたけど、ずいぶん自分の世界が広まった。そのときの費用は全部政府が出してくれた。俺はすごく優遇されて幸せだ。」

そんなことを話してくれた。

「病気の心配はないの？」と聞くと、「俺は病気になったことはないけど、心配したこともない。もし病気になったら医者が面倒見てくれる。日本では医者が病気の人間からお金をとるなんて、日本人は不幸だな」と返ってきた。

キューバ人の英語にはときどき戸惑う。何度聞き返してもわからないことがあった。

「ジャンクだよ、ほれジャンクピープル、オールドピープルのジャンクだよ。」

それでもわからなかったので「スペルを書いてくれ」と頼んだ。それを見ると「young」ではないか。

「これはヤングと発音する。ほれ、言ってみろ」

「ジャンク」

二人は顔を見合わせて大笑いした。うちと

けたところで、ちょっと品格を落としそうな質問をしてみた。

「街を歩いているときにおしっこがしたくなったら、キューバ人はどうするんだ？」

彼は笑いながら答えた。

「レストランに駆け込んで事情を話してトイレを借りる。」

「チップを要求されるだろう」

「要求されるときもあるし要求されないときもある。相手がキューバ人なら彼らも生活を知ってるから、ちょびっと払えばいい。まあ男なら手っ取り早く、ほらそこでやるんだよ」

「えっどこ？」

「木陰だよ」

「人が見てるじゃないか」

「タイミングをはかってやるんだよ」

彼の話聞いて以来、私はハバナの公園の木立には近づかなくなった。

暗くなるまで話し込んだ。メールアドレスを持っていると言うので、アドレスを交換し別れることにした。

彼は「そこからバスに乗る」と言う。私は「オビスポ通りに行ってみる」と言うと、行き方を教えてくれた。さっぱりしたもので、ヒネテーロと違ってどこまでも付きまとうことはなかった。

散策しているときに偶然、Instituto Nacional de Oncología y Radiología（国立がん放射線の研究所）の看板を発見した。私はもともとがんの放射線治療医であるから、興味が沸いてきてのぞいてみた。

玄関には受付係がいるが皆素通りしている。こじんまりとしたロビーには20人ほどの患者や家族がいる。その奥の廊下の入り口には職員が2人いて、通行者をチェックしている。

せっかくだから正直に事情を話してみた。グメだと言われれば諦めるだけだ。すると職

員は笑顔で「どうぞよーく見てくれ」と言って通してくれた。

診察室はどこも混雑していた。廊下や待合スペースの長椅子で診察を待つ患者や家族の風景は日本と変わらない。

外国人がアポイントもなくやってきて、忙しい診察の様子を見せてもらうなど無理だろうと諦めて外から見学していると、診察を終えた医師と看護師が待合スペースの長椅子に座っておしゃべりしているのが目にとまった。

思い切って尋ねてみた。

「私は日本の放射線治療医です。予約もなく突然やってきて恐縮ですが、放射線治療医とお会いすることはできますか？」

医師は「ちょっと待っててください」と言って連絡をとってくれた。

係が来てセミナー室に案内してくれた。そこで待っていたのが、アナサガスティ・ロレンソ医師である。

彼は英語でキューバのがん医療の概略を説明してくれた。全国がおよそ7ブロックに分けられ、各ブロックに拠点病院がある。そこには放射線治療医もいるし、基本的な検査や治療はできる。そこで治せない患者はここへ送られる。ここは、ハバナ地区の拠点病院でもあるし、キューバ全体の最後の砦である。

がん治療の専門医は、基本的には外科手術、放射線治療、化学療法をそれぞれ一年ずつローテートしてから自分の専門領域を決め、さらに一年研修してから一人前になる。彼自身は外科医を三年間やって、現在放射線治療を担当している。

突然仕事を中断させられたにも関わらず極めて好意的で、長時間かけて親切に説明してくれた。こちらも日本の様子を聞かれ、日本の医療が抱える地域格差、診療科間の力の差の問題や、病院と医者をもどのように選ぶかで患者の運命が左右されることなどを説明した。

すると彼は別世界が抱える問題に驚いて言った。

「すぐに改革すればいいんじゃないか？」

「問題は複雑でそう簡単にはいかない。」

そんなことを話しながら、放射線診断の話題になった。

「がんの画像診断は、診断専門医ではなく主治医みずからがやった方がよい。その方が目的意識的に検査がなされ治療に有効に活用される」という私の持論に対し、彼の反応は、「キューバでは放射線診断医が放射線診断をきちんと専門的に担っている」というものだった。

私の持論⁽¹⁾がそう簡単に理解してもらえないのは当然だが、キューバでも米国式の画像診断の中央化システムに対する信仰があるように感じた。

その議論の中で話が出た。

「マルチスライスのCT装置が壊れていて利用できずに困っている。メーカーに言っても、きちんとした返事をよこさない。購入時、装置のマニュアルもつけなかった。装置の仕様がわかれば、自分たちで修理できるかもしれない。米国が圧力をかけて嫌がらせている。」

「マニュアルなら日本にもあるはずだ。機種と製造番号がわかれば、メーカーにいる知り合いに頼んで調達できるかもしれない。それが無理なら、同じ装置を導入している病院に行ってマニュアルをコピーさせてもらうこともできる。後でメールで詳細を知らせてくれ。」

私の言葉に「そんなことができるのか」と彼は信じられない様子だった。

メーカーがこんな理不尽なことをするのは信じられなかった。メーカーの人間にとっては、技術畑であろうが営業畑であろうが、自社の優秀な装置が顧客に行き渡って活躍していることが何よりも喜びであるはずだ。米国の圧力が徹底していて、メーカーを脅かして

いるのであろう。

話し込んで時間がなくなり、施設を案内してもらおうとはできなかった。しかし、突然の訪問にもかかわらず、職員も医者もきちんと応じてくれた。これが日本なら、受付で「規則ですから」と言われ、追い返されたに違いない。そのときは、この差がキューバ医療を見る上で重要な鍵となるとは気付いていなかった。

日本に帰国してから、世話になった人にお礼のメールを送った。ところが返事がない。メールが届いたかどうかはわからない。

ハバナから地方を旅したときに世話になった民宿にもメールを出した。こちらはきちんと返事が来た。この民宿は英語が通用しないから苦勞してスペイン語で書いたのだ。

キューバはなおも反革命勢力の攻撃にさらされている。キューバ人個人を対象に餌をぶら下げての亡命工作が続いている。寝返った人間は反革命宣伝に利用されている。キューバが外国人の旅行者を受け入れているとはいえ、政府は警戒を怠らない。

それを思うと、外国人からのメールを検閲するのもやむをえないことだろう。手間を考え、手取り早く英語のメールをはねるということになっているのかもしれない。

それで、まだメールを出していなかった医師にスペイン語でメールを出してみた。するときちんと返事があった。ところが、メールのフッターにキューバ保健省の警告文が出ていた。そこには「このメールは国家保健システムの業務用メールサービスを通して届けられている。利用者は規則を守らなければならず最後まで責任を担う」とあり、キューバ保健省のサイトへリンクされていた。

キューバの医師のメールアドレスは、末尾がsld.cuで終わり保健省の管轄下でチェックされているのだ。これでは個人的な意見交換など望めない。

返事のあった医師とのメール交換は何度か続いたが、それが彼の意見なのかキューバ保健省の意見の代弁なのかはわからなかった。

3. キューバ再訪の計画

その後、札幌学院大学の井上さんからキューバに行かないかと話があった。文部科学省の科学研究費を使つての視察である。これは政府予算の研究なので、キューバ側もオフィシャルに対応しなければならなくなる。

後に数名加わつてグループで訪問することになり、どの施設を訪問するかなどを在日キューバ大使館に相談した。

文化担当参事官と会つたとき、私は質問した。

「キューバの医師に質問してはいけないことはありませんか。例えば『安い給料に不満はないか?』と質問してもかまいませんか?」

参事官は答えている。

「会議などの席で質問をされると医師は戸惑うかもしれない。しかし、外国人に質問を制限するようなことができる訳がない。どうぞ、何でもたずねてください。」

私は、グループとは別に単独で国立がん研究所を訪問したいので、スペイン語でメールを送つたところ、研究所の国際部から英語、スペイン語併記で歓迎するとの返事が来た。あわせて、保健省の許可を得るために、履歴書とパスポートのコピーを要求された。

指示どおりにしたら今度は、保健省の許可が得られたのでビザをとってくれと言ってきた。旅行者用の入国カードはすでに用意してあったのだが、仕方なく東京の大使館にビザを申請した。

ビザが貼り付けられたパスポートを受け取り、むむっ、と考えてしまった。入国カードでキューバに入れば、パスポートにはキューバ訪問の形跡は残らない。敵対する米国などへ行くときに、入国拒否されないための配慮

だろう。

ところが今回、キューバ政府は、私のパスポートにキューバ革命シンパという国際レッテルを貼り付けたのだ。キューバ医療を調査するなら、我々を支持するのは当然だ。そのように自覚せよ、ということなのだろうか。

それは考えすぎだろう。キューバとの関係がよくない国など米国の他にない。米国の圧力で貿易封鎖に協力せざるをえない企業はあっても、国家間で敵対しているのではない。ラウル・カストロが政権を引き継いでから、市場開放へ向けての改革が進行しており、米国との関係も徐々に改善されている。どうしても必要ならパスポートを新しくすれば済むことだ。それよりも国立がん研究所が歓迎してくれるのなら、研究所を中心に訪問計画を立てればよいのだ。

折りしもエジプトではムバラク政権が倒され、リビアで反政府運動が活発化していた。日本にいと、国際社会は一致してカダフィー政権の弾圧を非難し、反政府側を支援しているように見えるが、このときキューバ政府は、石油利権を狙っての欧米諸国の陰謀だとしてカダフィー政権側を支持していた。

チュニジアから始まった民主化の勢いは次々と波及し、次はどこどの国だ、と国際社会が見守っているときに、反キューバ勢力がこの機会を逃すはずがない。キューバは警戒を強化するだろう。外国からの訪問者に対する監視は強化されるに違いない。

私は、出発を前倒ししグループと行動を共にするのは2日間だけとした。ところが出発直前になってキューバ側旅行社から、到底理解の出来ない金額を請求された。説明を求めたが納得できる回答はなかった。

キューバには cuc と mnp の二重の通貨がある。外国人は cuc を使い、mnp はキューバ人が使う。二重通貨は、人や考え方も2つに分ける。外国人だけでなく、外国人相手にビジネスをする人たちや、外国から送金のあ

る人たちも cuc を使い、デパートで買い物をし、レストランで食事をする。一般キューバ人は mnp を使い、物質的豊かさからはほど遠い生活をする。

キューバ人医師は mnp の世界に住む。cuc の世界では外国人はビジネスの対象である。cuc の世界に客としてどっぷり浸かり、それからすぐに mnp の世界に飛び込んでそこに住む医師たちと平気な顔をして付き合えるはずがない。キューバ人医師たちと交流したいなら、できるだけ cuc の世界から離れた方がよい。そう考え、私はグループから完全に離脱することにした。

4. 研究所国際部のエリザベス

ハバナ到着後ドーラの民宿に落ち着き、翌日10時に研究所を訪れた。受付嬢に「今日10時に会うことになっている」と話すと、「今日は土曜日で誰もいないよ」という。「私を待っているはずだ」と言って、国際部に電話をかけてもらったが、誰も出ないと言う。

海外では日本で考えられないことが起きるものだ。諦めて、とりとめのないスペイン語会話をしていたのだが、「念のため国際部まで行ってみよう」と言うと案内してくれた。やはり誰もいない。置手紙をドアに貼って、帰ろうとすると、誰かが声をかけてきた。

「ドクターナトリでしょ」

やはり国際部のエリザベスが待っていてくれたのだ。メールで連絡をとってきた女性だ。英語が通じるので安心した。

10時から待っていたが、来ないので帰るところだった。成田空港で買ってきた葛飾北斎の柄の日本タオルをおみやげとってあげたら、「ウワーすてき！」と言って喜んでくれた。

アナサガスティはスペインに行っており、来週初めに帰ってくるそうである。土曜日は診療もないし、スタッフもいないので、月曜日に計画を立てようということになった。

前もってわかっていることなので、最初か

ら月曜日に約束しておけばよかったようなものだ。それに外国から訪問者が来るのだから、受付からすぐに連絡がつくようにしておいてくれと言いたくなる。

用が済んで彼女は帰宅すると言う。彼女は出勤日ではないのに、わざわざ私のために出てきてくれたのだった。バス停まで話しながら一緒に歩いた。

「コーヒーは好きですか？ キューバのコーヒーは独特でしょ。おいしい店があるわよ」

彼女が言うので「是非行きたい」とお願いし、コーヒーショップに連れて行ってもらった。私が代金を払おうとすると「そんな大きなお金、早くしまって」と言って、彼女が二人分の2ペソ支払ってくれた。私はcucしか持っていなかった。

コーヒーは白いカップとソーサーで出された。「おいしい」と言うと、彼女は満足した様子だった。

バス停まで送って戻ろうとすると、「歩いて帰ることにするから途中まで一緒に行きましょう」と言う。天気がよくて気分がよいときは、ときどき運動のため30分かけて自宅まで歩くそうだ。

歩きながら話題はキューバ音楽の話になった。「シルビオ・ロドリゲスが素晴らしい」と言うと、彼女も「でしょ。私もファンなの。CDいっぱいあるよ。ダビングしてあげるね」と話が弾んだ。

私は日本で、中南米で活躍する日本人歌手、八木啓代さんのキューバの話を知っているし、彼女のキューバ音楽の本²⁾も読んでいた。

シルビオはキューバのニューミュージックの担い手で、キューバのみならず海外でもしばしばコンサートの動員記録を塗り替えるほどの人気である。外ではキューバ革命支持派であり、国内ではときに体制に批判的である。

ソ連崩壊後、キューバ経済は危機的状態に

陥った。国民みなが栄養不良でやせ細り、亡命ミュージシャンが続出した。そんなときシルビオは「これがキューバの現実だ！」と言って国民を鼓舞した。キューバの社会主義が他の社会主義と違うのは、キューバには歌があるからだとも言われる。

「日本人シンガーでノブヨ・ヤギ、知っている？ HAVATAMPAは？」

「キューバに来たよ。彼女の名前は知らなかったけど素敵なりードボーカルだった。」

「彼女、僕の友達だよ。」

まるで女子高生の会話である。意気投合したのだが、私の民宿が見えた。

「今日は午後から野球のゲームを見に行くことになってるの。すごく楽しいよ、一緒に行く？ 荷物置いて、手ぶらで行かなきゃダメね。」

「行ってみたいけど、今日はやるのがいっぱいあるから行けないな。」

残念だけど別れた。

シルビオとノブヨのお陰でお友達になった。それで野球に誘ってくれたのだ。私は日本でも野球場でゲームを観戦したことはない。しかし、野球はキューバの国民的スポーツだ。何を置いても行くべきだったかもしれない。

その後、私の外出時に民宿に彼女から電話があって、月曜日、火曜日は研究所で何も見るべきものがないので、水曜日に来てくれということだった。

ここはキューバだ。こんなことで驚いてはいけないのだ、と自分に言い聞かせた。その間に会うべき人と会っておくことにした。

5. 友だちの友だちは友だち

5-1. ラファエルたち

二度目のキューバ訪問を計画しているとき、講演会がきっかけで工藤律子さんと知り合った。一貫して中南米やアジアの民衆の生活を追っているフリージャーナリストであ

る。ハバナの下町の住人ラファエル（仮名）と家族同様の交流があってキューバを何度も訪問している。私がキューバを訪問するというので、ラファエルに届ける荷物を預かってきた。

エリザベスと別れて民宿からラファエルに電話をかけた。本人の家に電話はなく、隣の家の電話で、50年前の日本の下町のように呼び出してもらうのだ。呼び出しの大声が聞こえて、しばらくしたら、意外とスムーズにラファエルが出た。

「どうぞ来てくれ、これからでもいい」と言うので、すぐにタクシーで向かった。

彼の家はハバナの古い街並みの古いビルの三階にあって、廃墟になっていたところを住めるように自分で工事をしたという。工事はなおも続いている。オールドハバナの歴史的遺産地区はビルの改修が進んでいるが、下町は未だ手付かずのところが多い。工事が進まないのは、人手がないからでも、人々が怠けているからでもない。単に建築資材が調達できないからである。

ラファエルは英語ができないので会話はスペイン語のみである。私の乏しいスペイン語に手振りと表情を総動員しての会話である。息子が学校で習った英語は会話ができるほどではない。スペイン語が出てこないときに英語の翻訳を頼むのだが、かえって混乱するばかりだった。

2階は彼の友人宅で、そこも工事中で友達が集まって手伝っていた。部屋の仕切りも、壊れた外壁も窓もクローゼットも自分たちでつくったと言って披露してくれた。初めて出会ったのに皆すぐに仲良くなった。キューバではこれが常である。工事現場の一角に電話があって、ラファエルが「君と話したのはこの電話だよ」と教えてくれた。

工藤さんから聞いていた近所に住む医師のDr. セイラのことを話すと、電話をしてくれたのだがつながらない。それで下町を案内し

てくれた。

近所の人たちはみな友人のようで、歩いているとラファエルに声をかけてくる。パン工場に行って作業中の友人に「一個もらうよ」と言う。「ダメ」といわれたのに1個かすめとって半分くれた。配給用のパンで味はなかった。

下町は人が多く活気がある。洋服屋も雑貨屋も品質はさておき驚くほど安い。酒と肉を売っている店はcuc 払いだった。青物市場から歓声が出た。みんな店をほったらかしてテレビに群がり野球を観戦している。エリザベスが見に行ったゲームだ。

日が暮れたのでそろそろ帰ろうと思ったが、途中でラファエルの友達が住んでいるので一緒に行くことになった。

その友人夫婦は小さな古い家に住んでいるのだが、とても議論好きであった。

私が「日本の医者には2種類ある。悪い医者は患者を治さないで薬ばかり与えて金持ちになる。良い医者は患者を治すが貧乏だ」と言ったら、興味を示してくれ話がはずんだ。

「システムが狂ってくると、それを悪用する悪い人間が出てくる。それはどこの国でも共通する」そのようなことを言っていた。キューバもそうだとやっているように思えた。

彼らは英語がわからない。私はスペイン語が不十分だ。話が進展するとお互いに言いたいことが伝えられない。何度も途中で話を諦めたのは惜しかった。

「近所にルシア（仮名）という医者がいるから是非会ってみるといい」と言って、連絡をとろうとしてくれたが不在だった。

「私も是非会いたい」と言って、私の民宿の電話番号を置いてきた。

ラファエルはその友人の家からDr. セイラに電話をしてくれた。

「Dr. セイラが時間をとってくれた。明日行こう。その後、家で夕食をご馳走する」と約束しラファエルは帰った。

外は暗いので夫婦は私が確実に帰れるようハバナ大学の前まで送ってくれた。

5-2. Dr. ルシア

その日の夜、夫婦から Dr. ルシアと連絡がとれたと連絡が入った。「これから行こう」と言う。

「こんな夜遅くにいいの？」

「いい。彼女は夜じゃないと会えない。迎えに行くからそこで待ってな。宿の主人と変わってくれ」

電話を切ってからドーラが言ってくれた。「あなたに歩かせるより、迎えに来た方が安心だって言ってたよ。」

Dr. ルシアに会えたのは夜の10時を過ぎていた。彼女は病院勤務の後、レストランで働いているのだった。大学生の息子とその友人もいた。

壁が真っ白でシミ一つないきれいな家だった。ソファもシンプルでモダンだ。ハバナの下町に似合わず洗練されている。彼女も息子も何となく身なりがあか抜けている。

私がキューバ訪問の目的を話すと、彼女はキューバの医師の生活に対する思いを語ってくれた。

「スペイン語が不十分なため、後で自分で辞書を引きながら聞き返すためだ」と言って録音の許可を求めたが、きっぱりと断られた。外に漏れるのを恐れるのは当然だ。

彼女の話は次のようなものだった。

1ヶ月の給料500ペソで暮らしていける訳がない。それで夜も働かざるをえない。悪いことをしているわけではない。医者もそうして懸命に生きている。

海外派遣に応じれば帰国してからも優遇される。だけど子供がいる人は子供が犠牲になる。大切な時期に親がいないのは子供の成長にとってよいはずがない。私は子供のために海外派遣を断った。

ここでもスペイン語が壁となって理解でき

ない言葉が多々あった。息子が学校で学んだ英語で翻訳してくれようとするが、あまり役に立たなかった。

私の熱意だけは伝わったようで、息子の友人が「友だちに日本語ができるのがあるから会ってみるといい」と言ってくれた。連絡をとろうとしたがつながらないため、電話番号を教えてくれた。

Dr. ルシアから医学や医療の話はなかった。恐らく既に情熱をなくしたのであろう。その一方、欧米風の生活スタイルやファッションに関心があるのは確かだ。

帰ったのは12時を過ぎていた。夫婦がハバナ大学入り口まで送ってくれた。「いつでも家に遊びに来てくれ、近くまで来たら必ず寄れ」と言ってくれた。

5-3. Dr. セイラ

Dr. セイラは Dr. ルシアとは対照的で体制順応型だった。約束の時間にラファエルと共に訪問した。

住まいは中心街の集合住宅にあり、建物の入り口がオートロックになっているのだが、インターフォンが機能していない。ラファエルが通りから三階の住居に向かって叫んだが気付いてくれない。仕方がないから小さな石ころを窓に向かって投げて、ようやく気付いてもらえた。

室内の趣味は、テレビ、ステレオなどをそろえてモダン志向のようだが、どれも30年前の日本にあったようなものである。整理整頓され掃除も行き届いているのだが、狭いリビングに飾り棚などがあまりゴタゴタあって狭苦しくて落ち着かない。言いかえれば生活感に溢れていると言える。

自己紹介の後、彼女は訪問者への説明に慣れている様子で、キューバの医療システムを一からろうろうと説明し始めた。それを制して私は、一般的なことは既に一通り勉強してきた。キューバの医者生活や、あなたがど

う考えるかについて話してくれないか、というようなことを言った。録音はあっさり許可してくれた。

Dr. セイラもまた英語がほとんどできない。「英語ができると聞いていた」と言うと、むきになって「誰がそんなことを言った？」と返ってきた。

ラファエルがとりつくろってくれたが、紹介してくれた工藤さんに迷惑をかけてしまっただけで、はいけないと気が気ではなかった。

Dr. セイラは高齢の女性なので、既に引退していると思ったが、病院に勤務する現役の産婦人科医師で、民宿もやっている。モザンビークに三年間行って来たそうである。

モザンビークは公用語がポルトガル語なので、似ているスペイン語ができれば役所仕事ではコミュニケーションがとれるだろう。しかし国民の教育水準が低く公用語のわかる人が少数派である。おまけに言葉の異なる数種類の民族から成り立っているため共通言語がない。現地語を理解するには三年交代は短かいし、効率が悪いだろう。

また支援を受ける国には、多国籍の支援者がいるだろうから、支援者どうしの話し合いや調整が必要になるだろう。そういうところでは一般に英語が用いられる。海外で活動するのに英語は必要なかったのだろうか。キューバ医師の海外派遣の一面を見た感じがした。

中年の男性が同席していたが、近所の男性でたまたま通りがけに寄ったという。ひょっとしたら外国人をチェックするために、党からの任務を受け来ていたのかも知れない。考えすぎだろうが、もしそうだとすると、私は悪い人間ではないから差しつかえない。

英語が少しわかるようで、話に加わりスペイン語の英訳をやってくれた。私が悪い人間ではないとわかったのか途中で帰った。

彼女との話し合いには笑いや共感がなく、険悪なムードだなと感じていたが、自分の民

宿の営業を忘れず「この次は是非うちに宿泊してくれ」と言って客室を見せてくれた。

風変わりな医者に戸惑っていただけのようだ。部屋からは下町を行きかう人々が見下ろせ、いい眺めだったが、壁一面に及ぶ大きな扇子が飾ってあるのには、成金趣味と共通のものを感じた。

私がCD棚にあったシルビオ・ロドリゲスのタイトルを見て、「ファンなのだ」と言うと、彼女からも「いいでしょ」と返ってきて、初めて互いが共感した。再びシルビオのお陰で友だちになれた。

「パブロ・ミラネスもきっと好きになるよ」といって2人のCDをプレゼントしてくれた。パブロはシルビオと並んで、世界的に支持されているキューバの代表的ミュージシャンである。

セイラはごく一般的なキューバの善良な医者なのであろう。長年臨床医として真面目に勤め、海外派遣にも応じた。子供も独立し定年後のことを考え民宿を始めた。お金の余裕が出てきたから調度品をそろえる。欧米の価値観や宣伝、流行に流されるのではなく、普通のキューバ人の中でキューバ人医師としての人生を営んできた。そこに不満はない。

海外派遣は子供を犠牲にするというのは、反キューバ派の宣伝か、欧米の一部の子育て論である。それを言うなら資本主義の競争社会にはびこる長期出張や単身赴任を何故糾弾しないのか。青少年の犯罪率が高いのは一体どの国なのかも知るべきである。親が海外に派遣されても、子供が親の仕事を理解するなら我慢もできるし、そのような親を見てむしろ立派な大人に成長する。

6. マソラ精神病院

(Hospital Psiquiátrico de la Habana)

ルシアの息子の友達が、スペイン語の苦手な私のために紹介してくれたのが、ミゲル(仮名)である。電話で連絡をとり、民宿の前に

あるホテルナショナルのロビーまで来てもらった。

キューバにも日本語学校があり、日本語を学んでいるキューバ人がある。後に道端で呼びかけられて、日本語で会話に付き合ってくれと頼まれたこともあった。彼らの日本語は完璧とは言えないが、私のスペイン語よりはるかに上手だった。

私がまず自分の旅の目的を話した。

「今、日本の医療は狂っている。日本の医療を見直すためにキューバ医療から得られるものはないかと探している。キューバ医療の本質を知るために、よい情報ばかりでなく悪い情報も知っておきたい。」

そう言うと彼は「協力はしたいが、医療水準の高い日本がキューバから学ぶことはあるのかな」と少し戸惑っていた。

話をしているうちに、前の年にマソラ精神病院で26名の患者が死亡した事件に話が及んだ。

この事件は海外のインターネットなどで、入院患者が虐待を受け凍死したとして写真つきで報道され、国内でも噂が流れているというところらしい。

ミゲルは言った。

「外から病院の様子を見るなら行けますよ。私も家族のお見舞いで行ったことがあります。お見舞いの人が出入りしているのだから、誰でも病院の敷地内には入れます。」

「それは是非見てみたい。」私はミゲルをお願いして付き合ってもらった。

敷地の入り口にゲートがあり守衛が監視していた。ミゲルがスペイン語で何か話したら難なく通過できた。後になって「家族の見舞いに来た」と言っていたことがわかった。

広い敷地には芝生と花壇があり、幅の広い車道とそれに沿う歩道が整備されていた。ロータリーのような広いところがあって、そこから横に道が伸びていた。我々はとりあえ

ずそちらを歩いてみた。両側に建物が並んでいる。ほとんどが1階建てで古かった。ときどき患者が声をかけてきた。その雰囲気はハバナの街中と変わらなかった。

建物の入り口には、婦人科や耳鼻咽喉科などの看板があるのが読み取れた。このエリアは入所者のための診療施設がある区域なのだと納得した。

鉄格子の扉がある建物があった。看板はないし中は暗くて見えなかった。扉のところに職員がいたので、ひょっとすると隔離施設なのかもしれない。建物の後ろ側も見たが、何もなかった。虐待事件があったとすれば、この中がその現場かもしれないが、単に物品保管施設であってもおかしくはない。日本でも薬品保管室には鍵がかかっている。

「あまりキョロキョロしないでくれ」とミゲルに言われて、それもそうだ。目立ってはいけないうのだと納得した。職員に「ここは何ですか」などと聞くことも許されない。

ロータリーまで戻ると正面奥に立派な建物が見える。病院本部なのだろう。その後方に別のエリアがある。そちらに向かって歩くと、ゲートはないものの道の横のブースから守衛が監視しているのが見えた。

「受付に行ってきたと言った方がよさそう。許可してもらえないなら出直そう。」

ミゲルにそう言って歩き続けると守衛に呼び止められることもなく通過してしまった。許可を求めるのは面倒なので、このままさっと見学して帰ろうと思い、本部らしい建物も素通りした。

そのエリアは何となく雰囲気が違っていた。患者たちがいぶかしそうにこちらを見ている。見慣れぬ東洋人がウロウロしているのだから不審に思っているのだろう。

トイレかなと思って覗くと何かの洗い場のようだった。患者の一人に呼び止められ「何しに来た」と聞かれた。「トイレどこ？」と言うと「受付の許可をもらっているか」と問い

詰められた。

そこへ病院職員がやってきて、「ちょっと来てくれ」と言う。まずいことになってしまった。悪いのはこちらなのだが、まるで犯罪者を捕まえたような態度だ。オフィスで尋問が始まった。

「私はスペイン語が苦手なので英語で話してもかまわないか」と聞くと、少し態度が変わったようで「英語でよい」と言ってくれた。

そこで私は正直に、自分が日本の医療システムの研究者で、外からなら病院が見れるというので来てみた。受付に行くつもりだった、ということ話を話した。

職員は「少し待て」と言って席をはずした。

これは困った。大変なことになるかもしれない。私については問題ない。万が一拘束されて予定通りに帰国できなければ国際問題に発展する。そこまでやるはずがない。問題はキューバに住むミゲルだ。

戻ってきた職員が英語で言った。

「このことはなかったことにしよう。次に病院を見学するときにはまず受付をしてください。これはどこの国でも共通のルールでしょ。」

多分、政府機関と連絡をとって、入国者リストなどから私の個人情報を調査したのだろう。事を荒立てるのは得策ではないと判断したのだと思う。第三者の目で見ても、確かに、何もなかったことにして嚴重に警告するというのが最も無難な対応だと思える。

とはいえ、ここはキューバだ。反キューバ勢力の攻撃に常に備えていなければならない国だ。ミゲルだけ密かに拘束されることもありうる。その後、彼の無事を確認するために、何度も電話をするのだがつながらなかった。結局、彼の無事を確認できたのは、帰国してからメールで連絡がついてからであった。メールはもちろん日本語である。とにかく無事でよかった。

帰国後、マゾラ精神病院事件のことをイン

ターネットで調べてみた。

日本語のサイトでは見つからず、“Mazorra”と“Cuba”をキーワードにGoogleで検索すると、事件に関するものがたくさんヒットした。しかし、ほとんどがスペイン語であり、多くが反キューバ宣伝サイトのものや、動画サイトに投稿された反キューバの立場のテレビ局報道の録画であった。

主だったもの^(3~6)を総合すると、事件の事実経過は以下のようである。

2010年1月11日の夜から翌朝にかけて、26人の患者が寒さのため病院で死亡した。被害者のほとんどが栄養失調の高齢者であり、当時ハバナは寒冷前線の影響で特別な寒さであったにもかかわらず、毛布などの支給はなく窓が壊れたままの病室もあった。

キューバ政府は、特別委員会をつくり事件調査にあたった。そしてその結果、翌2011年1月にハバナの州裁判所で裁判があり、被告13名に5年から15年の懲役刑が下された。

日本でも小さく報道された。朝日新聞は事件直後の2010年1月17日に、ロイター通信などによるとして、反政府側人権団体の告発をとり上げている。見出しには、「南国キューバお寒い病院、患者26人が凍死、反体制派「窓もない」」とあった。

2001年にマゾラ精神病院を訪れたイギリスの精神科医CollinsonとTurnerはこの病院のことを報告している⁽⁷⁾。その主な部分だけをピックアップし要約すると、

キューバには患者を収容する精神病院が三つある。マゾラはその一つで最も大きい。2000人を収容し、リハビリが必要な統合失調症が大部分だが、他の精神疾患や認知症、アルコール依存症などもある。入院の主な目的は、作業療法中心のリハビリで、昼間は病院から仕事をしに外へ出る患者もいるし、昼間は外で仕事をし夜間だけリハビリに通う患者もいる。

そのように冷静に見た上で、病院全体の印

象は、注意の行き届いた、よく組織された機関だというもので、ここで行われていることは、世界の精神保健に携わる人々への現実的政治上の教訓になることではないだろうか、と締めくくっている。

この事件を患者虐待だとして攻撃するサイトでは、裸で両手が縛られている遺体の写真を掲載して虐待の証拠としている。しかし、2～3名分の写真を示すだけで、別のサイトでも同じ写真が何度も見られることから、一箇所から流出した写真が繰り返し利用されているようだ。さらに遺体は、解剖用の作業台の上に置かれており、一連の写真の背景からも、これらは解剖直前のものと思われる。

日本でも、死亡に事件性があるときは、死因や事件の究明のために必ず司法解剖がされることになっている。どうやらこれらの写真は司法解剖のための写真のようである。解剖のために遺体を保存するときは裸体で両手を縛るのは通常で、それが虐待とは結びつかない。これらの写真は、むしろキューバでもきちんと遺体解剖が行われているということを示している。

司法解剖の写真がどこかから漏れ、解剖になじみのない一般の人に虐待をイメージさせるように利用されたものと考えられる。

事件は事件として、病院に問題があったことは間違いないが、それに対する政府の対応は裁判結果に現れている。一部に不祥事があってシステムのはころびがみられたとしても、それでキューバの精神医療やマソラ精神病院の全体がそうだと決め付けるのは間違っている。方向性が正しく、それに向かって絶えず努力がなされているのが大切である。

私たちの侵入事件は判決が出た後だった。病院の人事は刷新され、組織改革がなされたことだろう。病院はただ、きちんと手続きを踏んで欲しかっただけなのだろう。

見せたくないものもあるのかも知れないが、案内図もなく、博物館のように説明が貼っ

てあるわけでもないのに、案内者なしでは何が何なのか全くわからない。説明されればすぐにわかる些細なことでも、勝手な思い込みが誤解を招き、誤解が一人歩きする可能性もある。写真が流出し反キューバ勢力に不当に小細工され利用されたのだから、見学者はそのことをわきまえないといけない。

患者から「受付を済ませたのか」と聞かれたのは、見学者が案内者なしで来ることはないからであろう。日本なら不審者がいても患者は知らん振りをするとところを、患者が主体的に不審者から病院を守ろうとするその態度は、患者が病院から虐待されているどころか大切にされていることの証しである。

ミゲルが何のためらいもなく、私に家族が精神病院に入院していたことを言ってくれた。言われたときは気付かなかったが、日本では考えられないことだ。キューバでは精神病や精神病院に対する偏見が全くない。これは貴重な発見である。そこにキューバとキューバの精神医療の基本的考え方が集約されているように思う。

マソラ病院と私との約束は、「何もなかったことにする」だった。約束を破って報告するのは、私の貴重な発見を伝えたいからである。キューバ人は大らかである。文句はないであろう。

7. 国立がん研究所

(Instituto Nacional de Oncología y Radiología)

7-1. 見学の始まり

アナサガスティと会うのは一年ぶりである。スペインに研究のため三ヶ月滞在し帰ってきたところだった。私の履歴書に目を通していて、私の著書の『放射線科はもういらぬ』⁽¹⁾とはどういうことなのか、などと聞いてきた。

セミナー室で、何人かの中心的医師に紹介され、そのあと総長の Esteban Garcia Ar-

zola 先生から話があった。『キューバにおけるがんコントロールプログラム』という小冊子を渡され、キューバのがん治療体制と研究所の役割について説明された。

エリザベスが逐一通訳してくれるのだが、スペイン語式の英語なので、私の頭の中でもう一度翻訳しなければならない。医学用語で英語と共通語源のものは翻訳は要らないし、ゆっくり話してくれれば、何について話しているかぐらいはわかる。それに、早く済ませたい。

それで思い切って「ゆっくり話してくれれば通訳がなくてもだいたいわかる。その代わりに後でじっくり聞きたいから録音してもよいか」と申し出たら、快く受け入れてくれた。

アナサガスティが「途中でわからないときは聞いてくれ」と言ってくれた。その後、同席していたのはアナサガスティだけになり、他の人たちは消えた。

エリザベスには事前にメールで、何の準備もレクチャーも必要ない。普段どおりの診療風景を見学したい、と伝えてあったはずである。そうはいかないだろうとは思っていたが、先が思いやられる。

30分ぐらいの総長の話が終って、私から最初に出てきたのは、感想や感謝の言葉ではなく、「普段通りの診療風景を見せてくれないか」という言葉だった。相当失礼だったかもしれないが、思いが伝わったようで、その後レクチャーはなくなった。

そのあとアナサガスティとともに、どのように見学を進めるかを打ち合わせた。

「画像診断のところに行って、問題のCT装置を見てもらう。部門ごとにカンファランスがあるので、それに参加する。カンファランスはいろいろあるがどれにするか？」

私は「乳がん、婦人科がん、頭頸部がんを見せてもらって、余裕があれば全部見たい」と言っていた。

履歴書の過去の論文リストから、私が核医

学にも関心があると察し、核医学も見ようと言ってくれた。

アナサガスティは今、がん抗原と放射性化合物を利用したがんのターゲティング治療の研究に打ち込んでいる。私の論文リストには、放射線化合物の人体影響やがん治療への応用についての論文がいくつかあり、彼の研究と関連が深い。

そのためもあって、彼が自分の研究を話すときは熱がこもる。日本でも欧米でも盛んに研究されている領域である。私は見込みは薄いと思っているが、そんなことは言えなかった。そんなわけで、研究施設も回るようになった。こうして見学は始まった。

7-2. CT 撮影装置

見学は全てアナサガスティが付き添い案内してくれた。時間を奪ってしまって申し訳なかったが、案内なしではどこへもいけないのでしかたがない。

まず放射線診断のセクションに行った。スペースも通路も狭く、入り組んでいるのであまり機能的ではない。検査件数が少ないのだろう。ちょうど日本で言えば、200床ぐらいの小規模病院の放射線部といった感じだ。

CT室で問題のCT装置を見た。多断層を一挙に撮影できるフィリップス社製の新型機である。物理の研究者がいて問題を説明してくれた。ワンスライスなら撮影できるのだが、多断層撮影ができない。撮影を制御するプログラムが数個のカセットに収められているのだが、そのうちの一つが機能しないのが原因だそう。そのカセットが手に入れば解決するという。

一年前にアナサガスティから聞いた話ではマニュアルが手に入れば修理できるという話だったが、そうではないようである。私にはわからないので、帰国したら装置に詳しい友人に聞いてみると言っていて、機種と製造番号などがわかるように写真におさめた。CT装置

に関しては今回はそれが目的だった。

胃の透視などで使うX線撮影装置も見てくれという。見ると日本の東芝製だ。フィルム収納カセットのどこかが壊れていてフィルムが送られない。それで装置が使えない。これも写真を撮っておいた。

帰国してから友人に写真を見せてたずねてみた。CTについては「カセットはCTの心臓部だ。メーカーがカセットだけポンと渡すことはないな。日本では購入時にメンテナンスも含めて契約するんだけど、キューバではどうやってるんだろう。マルチスライスは管球に負担をかけるからすぐだめになる。管球は高価だし交換するにしてもいろいろ面倒なことになりそうだから、長持ちさせるならワンスライスで撮影している方が返っていいかもしれないな」ということだった。

透視装置のカセットについては、「どこか爪がまがっているとか、ちょっとしたことが原因だろうな。俺のように古い時代から自分で修理してきた人間ならわかるだろうけど、今はそういう人間はいない。すぐに直せると思うから東芝に相談するのがいいだろうな。キューバに営業所がなくても、メキシコとか近くにあるだろ」と言っていた。

そのままアナサガスティには伝えたが、その後連絡はない。

CTメーカーのフィリップスは、グローバル企業だがもともとオランダのメーカーだ。装置がどこの国で造られどこの国から輸入されたのかはわからないが、首尾よく装置だけは手に入れることができたのだろう。ひょっとしたらすぐに故障するとわかっていながら、売りつけてきたのかもしれない。

米国のキューバ封じ込め政策は、米国の企業だけでなく、米国と取引のある他国の企業にまで圧力をかける。言うことを聞かなければ取引しないという訳である。米国と取引のある企業にとっては死活問題で、正義に反するとわかっていても従わざるをえない。この

問題に関してはキューバに何の責任もない。

日本の東芝にも圧力がかかっているのかもしれない。それなら「東芝に相談しろ」という私のメールを見て、研究所の人たちは淋しく思っているかもしれない。

友人と一緒に行けたなら恐らく透視装置は使えるように出来ただろう。しかし、日本の病院に勤務する人間が10日間も仕事を休むことは出来ない。そういう事情で今回は一緒に訪問できなかった。ヨーロッパでは1ヶ月の夏休みが当たり前だ。経済指標はヨーロッパよりも豊かだと教えられている日本人だが、10日間の休みがとれないで何が豊かなのだろう。

7-3. 頭頸部カンファランス

カンファランスの形式は日本と変わりない。担当医が患者の病歴を紹介し、問題点を提示して参加者で討議する。必要ならその場で患者を診察する。患者は多数の医者に診察されるのだが、自分の治療法が熱心に検討されているのだから協力的である。

討議の内容から医者たちが何に困っており、何に関心があるかがわかる。手取り早くこの国の医療がわかる。

若い研修中の医者はもちろん、看護師なども参加しているようだ。日本と違うのは、地方の病院から医者が患者を連れて参加している点だ。活発に議論に参加し、積極的に質問をする。これは素晴らしい。日本が学ばなければいけない点だ。

日本の医療は学閥や縦割り行政などのせいで、地域格差、病院間格差が深刻である。がん患者は病院選びで運命が決まる。小児がんなどで、医者が生涯に一例出会うかどうかという稀な病気の患者でさえも、最初にかかった病院やその系列病院が抱え込んでしまう。そんなところでは若い医者は育たない。

それに対してキューバでは、全国を数ブロックに分け拠点病院をおき、そこで手に負

えない患者は、がん患者の場合、最終的には全てこの研究所に来る。ここで手術や放射線治療など必要な治療を終えれば再び地元に戻る。再発などで必要になったときは再び研究所に送られる。地方の医者は、患者とともにやってきて研究所から学ぶ。簡単なことだが機能しているようだ。

厚生労働省が打ち出している地域がん拠点病院の構想は、目標はこのようなものだと理解はできるが、机上の構想だけでは実現しない。日本では、珍しい症例を経験したというだけで、症例報告ができ実績として評価される。症例をどう扱ったかは問われない。だから、大学や系列病院がめずらしい症例を手放すはずがない。

カンファランスにはサンタナ先生も参加していた。発言されるときは小さな声にもかかわらず皆静かに聞き入る。

海外でも知られる頭頸部がんの長老で80歳を超えているが、現役で診療に携わっている。ヨレヨレの白衣を着て病院内を歩いているので、掃除の爺さんのように見えてしまうが、アナサガスティが高名な先生だと教えてくれた。私は著書をいただいた。2002年出版の『口腔がんの予防と診断』という本だ。

カンファランスではMRIの画像は見られず、存在するはずのCTフィルムもほとんど示されない。画像診断はあまり利用されていないようだ。サンタナ先生の著書でも画像はわずかしかが見られない。ということは、CT普及前の日本のように、頭頸部の診察は額帯鏡を駆使しての視診、触診が中心ということになる。私も額帯鏡を貸してもらって一人の患者の喉をのぞかせてもらった。診察椅子も照明ランプも日本の30年前の田舎の病院にあったようなものだった。

病理組織が不明の頸部腫瘍の症例があった。担当医の説明では、頸動脈を巻き込んでいて生検が危険である。しかし、徐々に増大して呼吸も苦しくなっている。思い切って組

織型不明のまま放射線治療を施した。増大は止まり今は落ち着いているという症例である。

日本なら組織型が不明のまま放射線治療をすることはまずない。少なくとも悪性腫瘍であることくらいは確認する。放射線科を紹介する前に外科医はあらゆることをやりつくす。このようなケースの場合、必ずCTやMRIの画像診断をする。組織診断のために血管の走行を確認したうえで試験切除をする医者もいるだろう。しかしリスクを避けて針生検にとどめるのが無難なところだと思われる。

組織診断の材料となる組織片は、大きければそれだけ情報量が多いが、大きく切除すると危険を伴う。素人は、直接見えるところだからガーゼで抑えれば簡単に止血できると思うだろうが、確実に止血したつもりでも、夜中に大量に出血することがある。その点、針生検なら危険は比較的少ない。

あとでアナサガスティに針生検のことを言ってみると、「危険を避けるためだよ。だから針生検もしなかった」とむきになった。

組織型が不明のまま治療を開始することは、敵がわからないまま闘いに挑むようなものだ。症例報告もできないし、がん登録して将来のがん治療に活かすこともできない。日本ではそのように叩き込まれてきた。

しかし改めて患者の立場で考えてみると、症例報告やがん登録などどうでもよい。苦痛をとり除くことが第一である。特にこのケースのように高齢者の場合はそうだ。どのみち放射線を照射することになるだろうから、治療開始は早いに越したことはない。

組織型がわからなければ線量や分割方法が定まらないというかもしれないが、照射を開始してその反応を見れば、放射線感受性もわかり最も的確な照射方法も決まってくる。放射線の感受性から組織型も絞られてくる。それをやるのが放射線治療医なのではないの

か。

後にたまたま研究所病理部の医者と会ったときに尋ねてみたら、針生検も注射器を使つての吸引細胞診も手がけているそうである。ただ、病理部から働きかけることはなく、依頼されたら診断をつけるだけである。病理医は日本と同じでやはり日陰の存在だ。

吸引細胞診なら危険性も少ない。日本の医者の感覚では、せめて吸引細胞診ぐらいはやってから治療開始してもよいのではないかと思った。

7-4. 腔内照射装置の残骸

婦人科カンファランスなども同じような雰囲気だった。

核医学は担当者が国際部まで来てくれた。紹介がすんだら真っ先に「メモリーを持ってるか？」と聞いてきた。「持っていない」と言うと、「なあんだ」という態度で、パソコンを使って説明してくれた。説明に慣れているようだった。

キューバでは訪問者がUSBメモリーを持って歩き、必要な情報を入れてもらうのが一般的らしい。そういえばエリザベスも聞いていた。シルビオの曲を入れるためだ。

すでに遅いのだが後に街中でUSBメモリーを購入しておいた。中国製で、日本で日本製を買うのと同じ値段だった。

動物実験や細胞実験などの研究のエリアも歩いた。どこも静かで人が少ない。みな留守番をしているようで活気はなかった。

渡り廊下を歩いているとき、建物と建物の間の人気(ひとけ)のないスペースの片隅に、ドラム缶の半分ほどの大きさで、医療機器の残骸のようなものが見えた。アナサガスティに「あれは何だ？」と尋ねると、「行って見よう」と言った。

一目見てアナサガスティは言った。

「ああ、これは古い腔内照射装置の残骸だ。片付けるように言ってあったのに。線源は抜

いてあるから安全だよ」

子宮がんなどの腔内照射治療に使うもので、以前はコバルト線源を用いていた。この治療は日本が先駆的だった⁽⁴⁾。今はキューバでも線源の小さなイリジウムを用いた装置を使っている。しかし、コバルトの半減期が5年余りなのに対し、イリジウムは約2ヶ月半であるため、数ヶ月おきに線源交換をしなければならない。原子炉のないキューバは、おそらくカナダの原子力関係の公社当たりから購入するのであろう。営利企業ではないから供給は大丈夫だろう。

この残骸、それにしても錆び具合からして数年は野ざらしのようだ。聞いてもいないのに、あえて線源は抜いてあると弁解がましく言うのは、本当は線源が入っているからかもしれない。キューバでは線源の処分場などを整備する余裕はないだろうから、人の立ち入らないところに置いているのかもしれない。線源購入から50年も経てば普通のごみになる。何となくアナサガスティは早く立ち去りたがっていたような気がした。

7-5. 週末のもてなし

金曜日の見学を終えて国際部に戻り、アナサガスティが言った。

「明日の土曜日に『テリー・フォックス がん撲滅マラソン大会』が開催される。がん撲滅のイベントだからこの研究所も関係している。患者団体も障害者も参加するし誰でも参加できる。去年は同性愛の団体もブラカードを掲げて参加していた。うちからも参加する。これは見ておくといい。明日の予定は大丈夫かい？」

私は「是非見てみたい」と返事し、オールドハバナのカピトリオ前の会場で10時におち会うことになった。

がんで片足を切断したテリー・フォックスが、がん研究資金を集めるために1980年、義足でカナダを横断して以来、彼の意思を継い

で毎年世界中でマラソン大会が開催されるようになった。キューバでは1998年から全土で開催されている。

国立がん研究所の充実した見学に丸々付き合ってくれたアナサガスティが「これは見ておけ」と言うのだ。どんなものだろうと興味深かった。

10時少し前に着いたが、カピトリオ前の広場は出場者と観客で一杯だった。アナサガスティを探そうとしたが、大勢の人で探すのは無理だった。

そのうちアナウンスが聞こえ、行進が始まった。走るのではなく行進かと思ったら、近くまで行ってみると走っている人もいる。マラソン大会とはいうものの歩いてよい。本格的ランナーもいれば、義足や車椅子の人もあり、介助や付き添いが一緒に参加してもよいのだ。

何の制限もない何でもありの大会である。乳がんなどの患者団体や、大小様々なグループが横断幕を掲げて行進し、このときとばかり自分たちの主張をアピールしている。こんなのは見たことがないので私は夢中で写真を撮った。

マラソンに参加していた研究所スタッフが、走りながら私を見つけて「アナサガスティたちは大会本部にいるぞ」と言ってくれた。それで、私は研究所の皆さんと会うことができた。

スタートから30分もしないうちに、先頭集団がゴールしてきた。それから若者たち、子供、老人、車椅子、歩き組が次々とゴールし、大会は1時間ほどで終わった。賞金も表彰もなし、出場者へのご褒美はペットボトルの水と観客の大声援である。

誰でも参加でき、何でもありということは、大会本部は順位をつけないということである。参加者自身と個々の観客が独自の基準で評価すればよいのだ。

若い美人も、太めのおばさんも、ハンサム

な若者もサングラスをかけたおっかなそうなおじさんも、老人も子供も、肌の色も白黒黄色ピンク褐色の色とりどり、障害者からアスリートまで、みんなが一同に参加し、観客が応援している姿は圧巻で、これこそキューバだと感じた。アナサガスティが私に見せたかった訳がわかった。

キューバは人間にランクをつけない国なのだ。そして、誰でも主張できるように、きちんと機会が与えられている。

午前中に大会を見物した後、アナサガスティが婦人を伴いエリザベスとその娘さんとともに、私のためにハバナを案内してくれた。我々はオールドハバナの街並みを歩き、美術館や建造物を見て回った。革命博物館や現代美術館は説明だけで、もっぱら入場無料の小さな美術館や建造物を見た。

エルメスビルでは、アナサガスティが守衛に事情を話してくれたので、内部まで入ってVIP待遇で見せてもらった。階段や壁の装飾、お洒落で贅沢な郵便受けやエレベーターの文字盤など、100年前のままで現役で機能している。現在はオフィスビルになっているそうである。

カテドラルを見物しているとき、偶然私が離脱したグループのメンバーと会った。「我々はそのレストランで昼食です」と聞いたことから、私は自分たちの昼食のことが気になった。

みんなレストランに入れば、アナサガスティの1ヶ月の給料が飛んでいく。だからといって、私が食事代を出すのは礼儀に反する。私はどうすべきなのかわからなかった。キューバ人医師は外国人をどのようにもてなすのだろうか？

そんなことを心配しながら歩いていると、アナサガスティが「コーヒーでも飲もうか」と言った。そこにコーヒーショップがあった。婦人がどこかで、パイやクッキー、菓子パンをどっさり買って来た。みんなで好きなもの

をとってコーヒーを味わった。

気のきいた昼食で私の心配は解決した。コーヒー一杯1ペソ、パン類は一人当たり1～2ペソだろうと思う。

その後、キューバ人向けの葉巻ショップで、アナサガスティは葉巻の選び方を教えてくれた。そして店先にあった葉巻を一つ一つチェックしてくれ、出来のよいもの4本を私に買ってくれた。1本1ペソだった。何とキューバで一番安い紙巻タバコ1本と同じ値段だ。街で貧しそうな爺さんが葉巻を吸っている姿を目にする度に、「何と贅沢な」と思っていたが、その謎が解けた。

キューバ人が行く店は、看板がないから外国人にはわからない。帰国の空港で5cucの葉巻を買って、帰国してから比べてみたが、私には125倍の値段の差を感じることはできなかった。

それから5人はキューバ人用の水ショップでうまい水を飲んで、渡し船で海を渡り、高台からハバナの街を眺め、カパーニア要塞を歩き、バスで海底トンネルを通過して帰ってきた。

バス代は一人40セントボ、渡し船代はわからないが1ペソもしないだろう。加えて彼は私に3ペソのゲバラコインを見せプレゼントしてくれた。トータル10ペソほどで、この充実感と満足感！これがキューバ人医師のもてなしだと納得した。

水ショップは独自の装置でろ過した水を飲ませてくれるのだが、後日訪れたら、私の顔を覚えていてくれてサービスしてくれたのはよいが、ニコニコしながら外国人価格を要求してきた。

8. 医師たちは月500ペソで生活ができるのか

キューバ医療の優れた点を見極めることが、日本の医療改革のためのヒントになる。その手がかりが得られるなら弱点を知る必要

はないのだが、弱点も合わせてキューバ医療なのだから分離できるものではない。

私は、いろいろな医師と出会い、話を聞いた。仕事が終わってから夜間レストランでアルバイトに精を出す医師、合法的に民宿を営んでいる医師、医師の海外派遣については、進んで受け入れる医師がいる一方では、批判的に見る医師もいることなどはすでに述べた。

マソラ精神病院での事件は、少なくとも医師の使命を忘れ患者をないがしろにする医師がいたことを表している。

そればかりではない。病院の薬品や物品を横流しする医師や、手術の順番を決めるのに賄賂を要求する医師の噂も聞こえてくる。卒業試験がなく卒業したら誰でも自動的に医師になれるというので、出来の悪い学生が集まる。そのためいい加減でやる気のない医師が多く、誤診が蔓延している。それでも国民は苦情を言うことができないで我慢している。そのような話も伝わってくる。

だが、考えてみよう。賄賂や誤診は日本でもよくある話で、完璧で理想的な医療システムなどはどこにも存在しない。どこの世界でも怠け者はいるし、システムの弱点を悪用する良からぬ人間が出てくるものだ。問題はそうした好ましくない人間が、システムの主流になっているか、はみ出し者にとどまっているかということである。

医師としての自覚が高く維持されているかどうかは、医師たちの関心が何に向かっているかが一つの指標になる。

私には、キューバ訪問の計画時から課題があった。それは「500ペソという給料で果たして、医師のやる気を維持することができるのか」である。これがキューバ医療を理解するうえでキーとなる。私は事前に在日キューバ大使館から「安い給料に不満はないか」と医師に質問してもかまわないという許可を得ている。

あるとき、それをアナサガスティにたずねようとすると、彼の方から言ってくれた。

彼は研究で海外にたびたび出かけるし、研究では研究所の中心的な存在であるから、給与は平均よりやや高い。婦人は同じ研究所の別の部署で働いている。子供二人は既に自立した。

「子育てに何ら経済的負担はなかった。教育費、医療費、住居費はかからない。病気や老後の心配もない。海外出張は全て公費だ。どうしてもお金が必要なのは、毎日の食費と服ぐらいだ。といっても食費はそんなにかからない。服もキューバ製は安い。ああ、靴だけは困るなあ。キューバでは安い靴を造っていないから、靴を買えば1ヶ月の給料が飛んでいく。」

靴の話に実感がこもっていて、その他では困らないということに余計に真実みを感じた。米やパンはただ同然、野菜、果物も数ペソの世界、服は日本の激安衣料品チェーンの10分の1以下の値段。映画や劇場の入場料金は大人2ペソ、人気ミュージシャンの生演奏は、広場や有名レストラン前の路上、ホテルの中庭で無料で聴ける。

外国人相手のレストランには行かず、ピフテキやブランドものの洋服を我慢すれば、確かに取り立てて困ることはないだろう。

我々は、必要なところにお金を使っていると思込まされているが、無駄遣いが経済効果を生むという資本主義の原理のために、どれだけ貢献させられてきたのだろうか。大病や老後などに備えて蓄えるが、いくら蓄えても不安はなくなるからさらに蓄える。

国民に必要なのは金銭ではなく、不安がなく本当に欲しいものが得られ、やりたいことができるということである。

アナサガスティには不安材料が見当たらない。研究に情熱的に打ち込んでおり、研究の話は自信と誇りに溢れている。彼にとって、豪華レストランで贅沢することや、リゾート

ホテルでバカンスをエンジョイすることやブランドショップでお洒落をすることなどどうでもよい。家族が健やかで、自分のやりたい仕事を職業としてできることこそ幸せなのだ。

医師の給与は何故高くなければいけないのか。人の命を預かる職業で責任重大だからなのか。いや、そんなことはない。職業に尊い卑しいはなく、どんな職業も社会になくてはならないはずである。

米国では医師の給与が高いから、我々はそのように思わされているだけなのかもしれない。給与水準や社会的ステイタスなどは、社会の中の力関係から生まれてきたものだ。

日本では権力や発言力の大きさが、生涯収入と比例し、社会的ステイタスと一致する。キューバの公務員は給与基準に職種間の差はなくみな平等である。

日本は仕事を金銭でしか評価できない。キューバでは仕事に成果が上がれば、金銭ではなくさらに仕事のできるポジションを与えることで評価する。それは、キューバでは仕事が人間の喜びと見ているからである。

国立がん研究所というキューバ医療の中心部にいる医師が、金銭ではなく医師としての仕事に満足していることが、それを示している。

課題の答は出た。安い給料に不満な医師もいるし、不満のない医師もいる。医師としての仕事を喜びとする医師は、給料に不満はなく、率先して仕事に励みキューバの医療を担っている。

9. キューバ社会と国民の生活

フェリックスとは是非会いたいと思い、出発前に日本からメールを送った。ホームレスと間違えた美術のプロフェッサーだ。たまたま誕生日に受け取ったので、私のメールが誕生日プレゼントだという喜びの返事があった。ハバナに来たら電話をくれといって電話

番号も書かれてあった。

ハバナに着いてから三度ほど電話をかけたが、いつも不在だった。いつも同じ女性が出てくる。民宿の電話番号を教えて電話をくれとメッセージを伝えてもらった。不在中に何度か電話があったが、ようやく彼の電話を受けることができた。

住所を言うと「すぐ行ける」というので来てもらった。

ドーラが「入ってもらいなさいよ」と言うが「えっどこに?」と聞き返した。「リビングでもあなたの部屋でも。ここはあなたの家よ」と言う。

日本の感覚に染まっている自分を恥ずかしく思った。日本人は他人に対してすぐに壁をつくってしまうから、客の客は他人ということになる。キューバでは友だちの友だちは友だちという感覚なのだ。

リビングでドーラにフェリックスを紹介し、その後、私の部屋を見せた。その後、夕食をご馳走すると言って民宿を出た。近くに彼が知るレストランがあるというのでそこへ行った。従業員は皆彼の友達ようだった。そこでとびっきりのご馳走を食べながら、近況を話してくれた。

「電話に出た女性は恋人だ。結婚はめんどろなのでしない。その代わり恋人が三人いる。それでいつも忙しくて忙しくて大変だ。三人それぞれに話を合わさなければいけないから、頭の中で混乱する。相手を間違えると『それ私じゃないよ』と言われて、しばらく口をきいてもらえない。」

「それは贅沢な悩みだ」と言うと、「これがキューバの平均だよ。俺は平均的なキューバ人さ」というのが返事だった。

恋人を三人も維持しているということは、生活に心配がないということだ。女性側の意見も聞かなければ不公平なのだが、ともかく異性を求めるのは人間本来の欲求だから、それをダメだと言うことはできない。

ところが、日本人は老後の心配、リストラの心配、病気の心配など、心配ごとが尽きない。恋人が一人できたら心配ごとが二倍になり、子供ができたらそれが数倍になる。キューバでは、国のサービスに多少の不満があっても心配する必要がないし心配してもしかたがない。

キューバでは離婚率が高いのだから、最初から結婚しないカップルも多い。子供ができれば女性が主になって育てる。子育てや教育、病気などにお金が必要ではないので、それでも困ることはない。

日本人は、他人の目が厳しくてこんな大胆なこととはできない。他人に対して壁をつくるので、みんなが孤独で淋しい。誰かと一緒にいなければ淋しくて生きていけない。昔から守られてきた結婚制度が孤独な日本人を救っているのかもしれない。

フェリックスは恋人で忙しいというのに、去年セントロ地区のカルチャーセンターの所長に抜擢された。大学も続けており掛け持ちしている。

「ハバナで一番大きなカルチャーセンターだぞ。一度見に来てくれ。建物が古くてオンボロだから、期待されると恥ずかしいけど。」

地域の青少年に、歌やダンス、絵画、演劇などを、それぞれの専門家たちが教えるセンターだ。これは是非見たい。彼の都合のいい日と時間を決め、見学することになった。

そんなことをしゃべりながら満腹になるまで贅沢をして、計算書を見て驚いた。何と二人で彼の給料の2か月分だ。外国人料金で請求されているのだろうが、彼がたびたび来るということは、給料の少ないキューバ人も、時には贅沢をするのだということがわかった。

約束の時間にカルチャーセンターに到着すると、彼は所長室の大きな机の席に座り、新規採用職員の面接をやっていた。「どうぞ入っ

てくれ」というので、面接の様子を横から見ている。面接試験というよりは、仕事の内容を説明し、出来るかどうかを確認しているのだった。応募者の欠点を見つけ出して排除するという発想がないのだ。

あのフェリックスがちゃんと所長をやっているのではないか。ときどき職員が部屋まで指示をうかがいに来たが、てきばきと指示を与えている。

面接が終わってから言った。

「よく来てくれた。オンボロで恥ずかしいな。飲むか。」

「仕事中にいいのかい。」

「少しならいいんだよ。」

紙コップに入れてくれたのはラム酒だった。面接を終えた女性も一緒に加わり、しばらく話をした。

その後レッスン風景を一つ一つじっくり全部見て回ったのだが、この国のすごさをまた発見した。

指導員は、みな現役の歌い手でありダンサーであり劇団員であって、みな若いし真剣である。生徒は、たまに初心者もいるが、ほとんどが相当なレベルだ。黒人、白人、混血、太った子、やせた子などいろいろいるが、一緒になって指導を受け、分け隔ては全くない。指導員は一人一人をきちんと見て、自ら手本を示し厳しく指示を与えている。

ここで小学生から自分のやりたいことを選び、みっちり鍛えられ、その中からスターが生まれる。キューバは小国にも関わらず、世界的スターをどんどん輩出している。それは子供の頃から、このようにして才能を発掘し、伸ばしていくシステムができていからであろう。スポーツの世界は見えていないが、音楽と同じように才能を発掘し伸ばして行くシステムがあるのだと思われる。

それに比べ日本は狂っている。やる気のある教師さえも歪んだシステムの中で挫折してやる気をなくし、そんな教師が子供を見てい

る振りをする。子供がダンスをやりたいと言ったら、親は受験の妨げになると言い、親が賛成してもお金がなければいい指導者にめぐり合えない。子供の才能を見ようとしないし、才能が伸びるのを邪魔するシステムになっている。そんな中で才能が開花するのは、たまたま才能が見つけれ、親や指導者などよほど恵まれた環境がそろった一握りだけである。

カルチャーセンターの近くに、彼の友人の画家のアトリエがあるので、一緒に訪ねた。ラーラといってキューバの若手では最も評価される気鋭の画家だ。友だちの友だちは友だちだと言って歓迎してくれた。

作品は、あくまで私個人の感想だが、人物、風景、静物などの題材にこだわりなく、自然や人間をえぐり出すような画風である。油絵のみならず、置物や装飾などの造形作品もあった。悲しきや激しさはあるのだが、美しさ、楽しさ、幸福感はあまり感じない。くよくよしないで歌って踊って楽しむ、それだけがキューバではないということがわかった。残念だが彼には英語が通じなかったので、感想は言えなかった。

壁全面に絵がかけられており、その他にもたくさん作品が重ねて立てかけてあった。そこに大きなベッドとパソコン2台があるだけのアトリエだった。

フェリックスが言う。

「彼には恋人が6人もいる。俺は3人でも大変なのに彼は本当にすごい。偉大だよ。それでちゃんと仕事もしている。公共施設の大きな壁画も描く。今、若手でナンバーワンだ」

キューバは画家をも遊ばせないでどんどん仕事をさせる。重ねてあった彼の作品のカタログを見ていると、「それ買って欲しくないか」と言う。

「いくらだ？」

「10 cuc. 俺も生活苦しいんだ。」

恋人が6人もいて苦しいはないだろう。「高い」と言って買うのをやめた。そしたら、帰るとき「友情の印だ」と言ってプレゼントしてくれた。何というやつだと思ったが、これがキューバだ。

フェリックスからラーラのアトリエの話を知ったとき、最初は紹介されないまま一人の客として覗いてみたかった。それで、カルチャーセンターに行く前にアトリエを探してみた。

通行人に尋ねると、「あそこにアトリエがあるよ」と言われたので行って見ると、路地全体が美術公園のようにアレンジされている一角があった。壁にはキューバらしい明るい壁画や踊るようなスローガンの文字が並び、路面は色塗られ、ベンチもいくつかあった。

「奥にアトリエがあるよ」と聞いてのぞいてみると、主がいたのだが、それはラーラではなかった。展示してある絵を全部見て回ったら、画家が話しかけてきて展示している絵の話をしたのだが、絵やCDを売りつけようとするので、「時間がない」と行って退散した。

退散するとき「今度の日曜日にここでフェスティバルがあって、いろんな人が大勢集まるから是非来てくれ」と言っていた。

どんなものだろうと思って日曜日に行ってみると、どうやらキューバの民間宗教、サンテリアのお祭りだった。大勢の見物客を前にいくつものグループが交替で音楽や歌、踊りや劇を見せてくれる。舞台をはみ出し観客の中にまで入り、ものすごい声量と圧倒的迫力で迫ってくる。

そのとき私の横で「今出てきた黒と赤の衣装が光の神シャンゴだ」というように、逐次解説してくれたのがユニエだ。

彼女は20代後半の女性で農業技師をしているが、将来映画製作に携わりたいといって学校にも通っている。彼女は英語ができ、かなりの知性派なので、話を聞くにはいい人に

出会えたと思い、お願いしてお祭り会場から離れ、静かな海岸で話に付き合ってもらった。

話を聞くと、何とユニエは卵巣がんを患い6ヶ月前に退院したばかりだと言うのではない。そういう体験があるので彼女は医療を熱く語る。

「お金を払う医療があるなんて信じられない。献血は無料のボランティアでしょ。そこに矛盾を感じない？ 健康に関することでお金がかかるのは不思議ではない。キューバの医療をどう思うかって。もちろん誇らしいと思ってるよ。だって私が今生きているのは、キューバにいたからよ。おかしい医者が病院のクスリを横流ししているという噂があっても、私を見てくれた病院とドクターは私をちゃんと治してくれたじゃない。医者はやる気がないとか誤診ばかりするとか言う人がいても、私はちゃんと生きているよ。」

救われた人は感謝をし、ひどい目に遭った人は非難する。これは当たり前のことだが、救われた噂はあまり広がらず、ひどい目に遭ったという噂は些細なことでも誇張され、すぐに広がる。だから噂を理由に真実がわからなかったと思っはいけない。

また、日本では、左右を間違えて臓器を摘出してしまったという事件がときどきあるし、悪徳医が診療報酬をせしめるために健全な子宮を摘出していたという富士見産婦人科事件のようなとんでもないことがあった。

だからといって、それが日本の医療の全てだと外国人に説明することはない。キューバの医療を見るときは、日本の医療を見るときのように公平である必要がある。

ユニエには、前回の旅で出会ったフラメンコ奏者に会うために、一人では行きにくいタブラオ(フラメンコレストラン)にも付き合ってもらった。その過程で、彼女は地図が読めないこと、キューバ人は道端で道を尋ねると自信満々に教えてくれるが本当はわかってい

ないこと、キューバ人もタクシーを頻繁に利用すること、タクシー料金は外国人が見ていないところではキューバ人料金であることなど、いろいろな発見があった。

私の民宿の近くには四つ星のホテルリブレがあり、交差点をはさんでコッペリアがある。一つのブロックを占拠して、巨大でモダンな建物を中心に、道路があつてベンチがあり売店もある。そこを通る度にいつも人が集まっているので、最初はイベント会場だと思っていたが、これが国営のアイスクリームチェーンである。長い行列はアイスクリームを食べるための順番待ちだ。日本の旅行ガイドには、国民に大人気だが外国人は入れないと書いてあった。

たまたま行列が見えないときがあった。のぞいてみると、客は絶えないのだが待たないでスムーズに流れている。私はそのまま流れに乗って中に入った。外国人だからお断りということではなく、案内係りが座席に誘導してくれた。

大きなスペースに椅子とテーブルが並んでいるだけで、このような部屋がいくつもある。

十代後半の男女4人のグループが同じテーブルについた。周りを見たが、一人でアイスクリームを食べに来る人はいないようだ。

ウェイトレスが注文をとりに来た。メニューなんてない。若者たちが何かを注文すると品切れで、残念がっていたが別のものを注文した。私が「『あいすくりーむ』を食べたいけど、スペイン語でどういえばいいの?」と、隣の女の子に尋ねると「エラド、私たちと同じ」と言ってウェイトレスにも注文してくれた。外国人の言動の一つ一つがおかしいようで笑われてばかりだ。鉛筆が転がっても楽しい年頃なのだろう。

隣の女の子には何とか英語が通じるようなのでいろいろ尋ねてみた。

「ここへはよく来るの?」

「はい。でも高いからそう頻繁には来れない。」

彼らは将来看護師や検査技師になるための学校に通っている。学校は楽しいが厳しい。今試験に備えて勉強中だ。勉強は友達が集まって一緒にやる。落ちこぼれはいない。遅れている生徒を友達は放っておかない。早く卒業して立派に仕事をやりたい。こんなことを話してくれた。

なるほどと納得した。キューバでは落ちこぼれが生まれにくい。努力してもついていけない生徒は他の学校へ行く。形だけの卒業証書をもって現場で働くということはないのだ。

英語が話せる子と話せない子に別れるのはどういう訳だろう。学校では英会話教育をあまり重視していないのだろうが、話せる、話せないは語学力の差というより積極性の差なのだろう。もう一人の女の子も会話に加わってよく話してくれたけれど、男子二人は話を聞くだけで一言も話さなかった。女の子二人は積極的で男子二人はおとなしかった。

アイスクリームはボリュームたっぷりでおいしかった。値段は一つ5ペソだった。若者たちはもう一つずつ食べるというので、「勉強しっかりね、チャオ」と言って別れた。

ハバナの街を歩いていると軒先でCDを売っている光景をよく見かける。立ち寄ってみた。

売っているものはオリジナルアルバムではなくコピーしたものだ。ボール紙のケースにカラーコピーした表紙を貼り付けたもので、素人が手作業で作って売り物にしている。

「シルビオ・ロドリゲスはある?」と尋ねると、「あるよ」と言ってとってくれた。一枚1 cuc である。

「5枚買ったら4 cuc にしてくれる?」

「だめ」

「どうせ違法コピーだろ」

「違法じゃないよ」

てっきり嘘だと思った。空港の荷物検査で見つかったら面倒なことになると思ってそのまま立ち去った。後で民宿のドーラに聞いて、キューバでは違法ではないことがわかった。

なんと、キューバの音楽はコピーして大量に配っても、売りまくってもかまわないのだ。これは驚きだ。著作権は著作権者の権利を守るためにあるとずっと信じ込まされてきた。

キューバのミュージシャンたちはどうして生活しているのだろう。シルビオ・ロドリゲスやパブロ・ミラネスなど世界的歌手なら、海外でCDを出せば、すぐに億万長者になれる。彼らは海外公演をしばしばやっているのだから、亡命のチャンスはいくらでもある。CD制作会社からも反キューバ派からも、甘い誘いや汚い工作は絶えないだろう。

でも彼らは、億万長者よりもキューバを選んだ。キューバ国民と運命を共にすると決めたのだ。

ときに政権を暗に批判する歌を歌うが、政権はそれが熱烈な支持者の意見だとわかっているから、無視はできない。どこかの国のように、もし彼らを投獄すれば、政権は大きな支持者を失い崩壊に向かうということをよく知っている。「キューバの社会主義が他の社会主義とは違うのはキューバには歌があるからだ」というのはこういうことなのだ。

10. キューバから帰国して日本の原発事故対応を見て

大地震が日本を襲ったのは、私が成田を出た翌日であった。中継地トロントのホテルで、すさまじい津波被害の映像を見た。すぐに日本の家族や兄弟に電話をかけたがどこもつながらず、翌日になってようやく名古屋の弟につながった。関東、東北は名古屋からも電話がつながらない状態だが、内陸部は被害は少ないと聞かされた。そのまま帰国しようとしたが、成田行きは欠航で見通しは不明という

ことだった。

トロントで待機するならキューバまで行ってから連絡をとろうと思って、キューバに向かった。ハバナで福島原発の爆発を知った。会う人ごとに「家族は大丈夫か？」と聞かれるが、連絡の手立てはなかった。毎日電話をかけ続けて、ようやく家族につながり無事が確認できたのは、地震から4日目だった。

民宿のドーラが「ずっと暗い顔をしていたのがいっぺんに明るくなった」と言って一緒に喜んでくれた。

キューバで予定通りの滞在を終え帰国したのだが、帰国後ニュース報道を見て驚くことばかりだった。原発事故の解説に出てくるのは御用学者だけで、本当に知る専門家が出てこない。御用学者たちこそ原発安全神話をでっちあげ国民を騙して、危険と紙一重の原発の建設に積極的に加担してきた張本人ではないか。犯人がテレビに出て自分の犯罪を解説しているのだ。

国民が放射線の影響に不安を抱いているというのに、素人の官僚や官房長官が解説をしている。大学へ戻ると「マスコミの取材には応じてはいけない、混乱を起こさないよう発言は慎むこと、政府の見解が唯一正しい」などと通達があるではないか。

帰国するまでは、大惨事を乗り切るために国民が一丸となって立ち向かっていると信じていた。普段はおとなしい放射線科の医者たちも、このときばかりは活躍しているだろうと疑わなかった。放射線学会も大学もおかしいし、メディアもおかしい。いや、日本全体が狂っている。

日本には、知恵を結集するシステムがない。事故の対応を指揮するのは素人政治家で、素人官僚の言いなりになっている。知恵を求めるのは肩書きだけの御用学者で、報道するメディアさえも素人官僚に協力している。

日本という国は、大藏官僚を頂点に、各省庁、政治集団、都道府県庁、司法機関、警察、

大学、学術団体、大企業、メディア、映画、音楽、スポーツ、相撲などあらゆる単位がムラで成り立っており、ムラ間の支配、被支配の権力関係が確立している。

ムラが目指すものはムラの利権の拡大であって、看板は表向きの意味しかない。そしてムラに逆らう人間はムラから排除されていく。日本では、政治とは利権の配分のことである。だから力のあるムラどうしで利害の対立が生じると政治は進まない。震災復興が進まないのも、問題満載の医療制度の改革が進まないのも原因はここにある。ムラシステムの下にあるメディアは、そんな状況にもかかわらず、問題なく進んでいるかのように報道する。

以前から日本を支配するこの構図は、大惨事を起こし国民が不幸のどん底に追い込まれても全く変わらない。もともとムラシステムの支配層は、どのようにして国民から絞りとりかしか考えてこなかった。

私は、キューバで見て聞いて学び、すぐにその目で日本の震災対応、原発事故対応を見るという稀有な機会を与えられた。日本とキューバの違いが浮き彫りになって見える。

キューバは何度も国家の危機を経た。旧ソ連崩壊時の食糧苦境は、国家存亡の危機であった。そのときキューバでは、みなが考え行動した。歌手さえも今、自分は何をすべきかを考え行動した。そうして国民の知恵と能力を結集して、有機農法による食糧の自給自足体制を一挙につくり上げた。

日本のムラシステムは権力を中央一極に集中させる。下部のムラは中央に支配され、その支配は末端にまで及ぶ。末端には裁量権が全くない。「規則ですから」とは「中央の意思ですから」の意なのである。

キューバ国立がん研究所の守衛は、自分の判断で外国人医師を受け入れてくれた。職員も医師も自分で判断し行動した。多くの裁量権が末端にある。キューバ人は人間で、日本

人はロボットのように見える。

国立がん研究所のカンファレンスでは、地方の病院の医師たちが患者を連れて参加していた。彼らは熱心に患者の説明をし、患者の治療のために指導医たちの意見に耳をすませ、活発に討論に加わり、自分の考えを堂々と発言している。その姿勢から、彼らの意欲が伝わってきた。

私は日本で同様の患者を治療し、同様のカンファレンスに出席していたのだから、違いがはっきりとわかる。日本ではムラで生き残るために周りをうかがい自分の意見は決して言わない。発言するのはムラの利益を代弁するときだけである。

キューバでは、若い医師たちが地方や様々な部署を回りながら学び、堂々と発言し鍛えられ、意欲と能力のあるものが抜擢され重要ポストに就いていく。そこには人種、出身、学閥などの壁は見られない。

友人のアナサガスティもこのような過程を経て今がある。やる気のある者が中心的な役割を担っていく。医師の評価は給与アップではなく、さらに仕事ができるポジションである。スポーツ、芸術と同じように、医療の分野でも人材が発掘され、その能力が無駄なく存分に活かされている。これこそが医療改革論に最も必要なものだ。

日本ではムラに忠実な人間だけが起用され、いかに意欲や能力があっても、ムラに従わない人間は排除され、意欲と能力が無駄になっていく。厚生労働省ムラや医療ムラの目標は、患者の利益ではなくムラの利権獲得だから、この患者不在のムラシステムは延々と引き継がれることになる。

どこの社会にも、システムに積極的に貢献する人間もいるし、不満分子もいる。システムに貢献する人間がシステムを担うようになる。陰で不満をいう人間はどこにでもいるが、システムに逆らう人間はシステムから排除されて行く。

日本のシステムは建前は立派だが、実態はどこもムラの利権の擁護が第一である。そのことは、今回の震災や原発事故に対する対応ではっきりと暴露された。本当に原発を知る人間や、住民の健康を心配する医者たちの発言は、原発利権や政治的理由から封じられている。嘆かわしいことにマスコミまでもそれに加担している。

ではキューバの医療はどうか。そもそもキューバ革命は、貧乏人や病気になるでも医者にかかれぬ人たちのためのものであった。彼らが支援した革命だった。革命後は、腐敗した政治家や墮落した官僚たちは排除され、そうした政治家や官僚を抱きこんで国民に配分されるべき富を独占してきた資本家たちも一掃された。

その革命の精神は今も引き継がれている。だから国民の尊厳を守る教育と命を守る医療は無料なのであり、国の最重要政策なのである。キューバの医療システムは国民の命を守るためにあり、医師はその目的のために仕事をする。それがキューバ医療の建前である。

キューバのシステムには日本のムラシステムのように本音と建前の区別はなく、本音と建前が一致する。だから誰もが堂々と発言でき、意欲と能力が正當に評価される。

欲望刺激がとみに増し、物欲に負け不正に手を染めるはみ出し者が出たとしても、月給500ペソでシステムに積極的に貢献して行こ

うとする意欲ある若い医師がいる限り、このシステムは守られるし、国民から支持される。今後いろいろな改革はあるだろうが、基本は変わらないと確信する。

日本に今必要なのは、ムラシステムの支配からの脱却であり、建前を本音として真剣にとらえることである。それは即ち、危機の対応においては国民の意欲と知恵を結集するシステムであり、医療においては患者の幸福のために貢献しようとする意欲と能力を最大限に活用するシステムである。

文 献

- (1). 名取春彦『こんな放射線科はもういらぬ』洋泉社 2009.
- (2). 八木啓代, 吉田憲司『キューバ音楽』青土社 2009.
- (3). <http://www.elnuevoherald.com/2011/01/17/870711/juicio-por-muertes-en-mazorra.html>
- (4). <http://www.youtube.com/watch?v=xE2b8YrP5u4>
- (5). <http://translatingcuba.com/?p=6753>
- (6). <http://www.google.com/hostednews/afp/article/ALeqM5jDJrTNw4CxtphGy6fcxK68FWMATA>
- (7). S. R. Collinson, T. H. Turner. Not just salsa and cigars: mental health care in Cuba. *Psychiatric Bulletin* (2002) 26: 185-188.